

○手帳を繰ると、鎌田慧氏にアタックしたのが三月十八日。東京の桜は二分咲きで、朝から冷たい雨が降っていた。「江戸川橋」と氏はおっしゃつた。なるほど、『場所』の一篇「日白閣口台町」の冒頭で、当ランドマークは「神田川に掛った江戸川橋」と紹介され、ここを起点として、瀬戸内さんが二期にわたって住み、数々の秀作を生み出した〈日白台アパート〉への道筋が示される。三十歳目前の、月刊総合雑誌「新評」編集者は、そこを訪れ、新刊の『死せる湖』を贈られたという。また、大逆事件の菅野須賀子を書きたい気持ちを聞かされたとか。近代日本のアナキズム群像をいち早く小説にした先駆性を、氏は言われた。「菅野須賀子」にピンとこなくて相談に乗れなかつた自身の不明も。そんなゆかりあるルポライターが、本誌に寄稿のうえ、十一月十一日、ここ四国の徳島市で講演される。大杉栄没後百年。故人がもし存命だつたら、あの高く透る声で、共に大杉の魅力を語つて倦まなかつただろう。(征)

○三回忌にあたり、「寂聴を詠む」に全国から多くの俳句が寄せられたのは有難く、寂聴さんへの想いを受け止める場所になれたことも、うれしかつた。この企画に賛同し、背中を押してくれた黒田杏子先生の急逝は非常に残念だつた。常に寂聴さんの方が頭にあり、パワフルな明るい声でよくお電話をくださつた。また、快く写真を提供していただいた西田茂雄氏の逝去にも声を失つた。ナルト・サンガに法話の度に撮影に来られ、楽しいお話をしていた姿が目に浮かぶ。今号は、寂聴さんを知る広範囲な方々が書いてくださり、その時々の寂聴さんの姿や表情、生きる姿勢が鮮やかによみがえる。富士茂子さんの冤罪事件について書いてくださつた方がいたのも貴重である。また崔順愛さんにより、韓国での受け入れられ方もよくわかる。今後、イタリアのように寂聴文学が韓国で翻訳・出版されることを夢に見る。(紀)

「寂聴」第2号 2023

発行日 2023年11月9日

発行所 瀬戸内寂聴記念会

徳島市中洲町3-40-802

Email: norikomizugame@yahoo.co.jp

Fax: 088-661-3292

発行人 岡本 智英子

編集人 竹内 紀子

印 刷 徳島県教育印刷株式会社